

2013年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 配布されたもの以外の下じき・用紙は使わないこと。
5. 用紙を立てて見ないこと。
6. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちのわるくなった場合は、だまって手をあげること。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

人は自分の育った社会の影響を受けるものだが、動物に対する考え方もその例にもれない。

オオカミとはどういう動物だろうか。今の日本にオオカミはいないから、ゾウやライオンのようにどこかその国にいる猛獣のひとつであるが、そのイメージはライオンよりは悪いようだ。これはどうやらヨーロッパで作られたイメージによるものらしい。中世にヨーロッパで描かれたオオカミの絵は巨大でグロテスクで、いかにもおどろおどろしく描かれている。「赤ずきんちゃん」に出てくるオオカミは残忍であるだけでなく、いやらしい印象で、最後は殺され、腹をはさみで割かれて赤ずきんちゃんを取り出される。たしかそのあと腹に石を入れられて、池に落ちてしまうのではなかったか。まったく情け容赦がない。「三匹の子豚」に出てくるオオカミもずるくて悪い。

私たちはそういう童話を読んでオオカミに対するイメージを作ってきたが、戦前の日本では道徳教育にイソップの童話が紹介された。これはある男の子が「オオカミだ!」といったら、大人が大騒ぎをしたので、おもしろくなって何度も同じことをいううちに、誰も信用しなくなり、無視するようになった。それで本当にオオカミが出てきたときに「オオカミだ!」と叫んでも誰も助けてくれなかったという話である。『尋常小学修身書』という教科書には日本の農村の景色の中で着物を着て、泣きながら走っている少年の絵がある。

日本の子どもたちはこの少年を自分のことのように思い、見たこともないオオカミを恐ろしい動物だと想像し、嘘をついてはいけないことをたたき込まれた。しかし考えてみれば、これはヨーロッパ人のオオカミのイメージそのものである。

では①近代化以前の日本人はオオカミにどういうイメージをもっていたのだろうか。今となつてはオオカミについて日本人がどのような感覚をもっていたかを知るのはむづかしいが、それでもいくつかの手がかりはある。

日本の農民にとつてもっとも重要なのは米である。稲作こそが農業の本道であり、稲を育てることができない土地は評価が低く、小麦やイモしかできない農民は見下されることに甘んじなければならなかった。田んぼの水をめぐって骨肉の闘いがあつた。稲作に邪魔になるもの、大水や日照りなどの気象のほか、(注1) いもち病などの病気、(注2) ウンカやスズメ、イノシシなどの動物はすべて農民を苦しめる憎い敵にはかならなかつた。農業とはこうした敵との闘いの歴史そのものであつたとさえいえる。(注3) シシ垣についてはすでにふれたが、それは文字通り汗と涙の結晶である。そうであつたればこそ、シカやイノシシを襲ってくれるオオカミは自分たちの苦しみを和らげてくれ

る天の助けと映ったことであろう。しかも自分たちが知恵をしぼり、ありつただけの技術を使つてもつかまえることができないシカやイノシシをいとも簡単にとらえ、風のように去つていく。農民には、オオカミは超能力者に思えたであろう。埼玉県の三峯神社はオオカミを祀る神社であり、関東地方の農家にはオオカミのお札が貼つてある。

いっぽう、北上山地などでは馬の飼育が盛んであった。農業被害を出すシカを退治してくれるという点ではオオカミは自分たちの味方であつたが、馬を襲われることもあつた。このため農民の心理は複雑であつた。一人で山道を歩くのは不安なことで、まして夜道はきわめて恐ろしいことであつた。そうしたときにオオカミが密かに人のあとをつけるということが信じられていた。あるいは実際にそういうことがあつたのかもしれない。

恐ろしいという心理は憎しみにつながることもあるが、こうした状況においては（注4）畏怖となり、さらには畏敬にもなつた。オオカミということばの解釈は定まつていないが、「大なる神」である可能性は十分にある。東北地方では「お犬さま」と呼ばれていたようだ。いずれにしても一畜生ではなく、特別な扱いをされていたことはまちがいない。

生物の種として日本にいたオオカミも欧米のオオカミも同じである。では同じオオカミに対して、日本では神のように畏敬されていたのに、なぜヨーロッパでは悪魔のように嫌悪されるといつまたく違う評価を受けるようになったのだろうか。

このことを私（高槻）は農業形態の違いによる農民の考え方によると考えた（高槻、二〇〇六『野生動物と共存できるか』）。稲作をする日本ではシカやイノシシが敵であり、その敵を襲ってくれるオオカミは味方となつた。これに対してヨーロッパでは小麦を栽培し、ヒツジを飼育することが農業の土台だつた。そうした日常の中でオオカミがヒツジを襲うことがあつたはずだ。愛らしい子羊や（注5）邪心のなさそうな親羊が殺されたのを見たヨーロッパの農民がオオカミを嫌つたのは当然であろう。その予防もしたが、オオカミはそれをあざ笑うかのようにさらにヒツジを殺すこともあつたであろう。それはまさに悪魔のイメージであり、能力があればあるほど嫌悪は強くなつた。

北アメリカにはヨーロッパの価値観がそのまま持ち込まれた。オオカミは見つけ次第射殺され、毒殺が行われた。ちよつと信じられないことだが、それは一九六〇年代くらいまで行われていたらしい。肉食獣は「敵」とされ、徹底的に撲滅が図られた。北海道のエゾオオカミの撲滅はアメリカの「指導」によつて達成された。

②悲劇的なことに、北アメリカの先住民はオオカミに対してわれわれと共通する畏敬の念をもつていたらしい。ただし、彼らは耕作はしな

かったから、オオカミに対するイメージは稲作民のそれとは違う。むしろ草食獣を狩猟するハンターとしてライバル心を持ち、その手強さから好敵手として尊敬していたものと思われる。自分たちをクマなどとともにオオカミの（注6）末裔だと信じていた部族もあった。これはアイヌの考え方や自然観と同質であるし、モンゴルのチンギスハンが「蒼きオオカミ」を自分の祖先だと考えていたことなども重なる。オオカミをめぐる、それに敬意を払いながら共存してきた先住民と、悪魔として憎悪する、西洋からの移住者たちは必然的に対立し、後者が力でねじ伏せた。「オオカミなどを尊敬する愚かな者たち」と（注7）蔑視しながら。

歴史はさらに③皮肉な経緯をたどる。オオカミを憎み、いるだけで容赦ない駆除をし、撲滅を果たしてお祝いをしたイエローストーン国立公園は、その後予想もしなかった難問に直面することになる。オオカミが頭数を抑制してきたワピチという大型のシカが増えて、（注8）植生に強い影響を与えるようになってきたのだ。森林は破壊され、川辺のヤナギ林がなくなつて、たとえばビーバーがすめなくなつたり、ヤナギ林に営巣する小鳥がいなくなつたりと、生態系全体が病んだようになってしまった。

実に身勝手なことに、そのことに気づいた研究者は「オオカミ復帰」の必要性を認識し、それを実現するために大規模な計画を実行した。そして、時間をかけて社会のオオカミ嫌悪をなくす教育をし、獣医学や生態学を巻き込んだ計画で、オオカミ復帰を実現した。このことは世界で初めて国立公園となったイエローストーンが、一〇〇年以上の時間をかけて学び、それまで蔑視してきた先住民の自然観によりやく到達したとみることができる。

動物学者はもちろんオオカミの実像をとらえていたが、一般の人々は「オオカミは悪魔のように残酷で邪悪だ」というイメージが（注9）払拭できないでいた。オオカミは肉食獣であり、必然的に動物を殺して食べる。それは人間の価値観を投影すれば残酷であるかもしれないが、その動物が進化の中で獲得した性質そのものにほかならない。ほかの生物を殺すことが残酷で許されないのであれば、生きていける動物はいない。

また動物生態学はオオカミがたとえばシカを食べることを、オオカミとその食料であるシカとの関係というとらえかたをするにとどまらず、オオカミの捕食がシカという生態系に強い影響をおよぼす草食獣の密度が高くなりすぎないように抑制しているという役割を明らかにしてきた。そうしたことが理解されたからこそ、オオカミの復帰が必要であるとされ、それを社会に受け入れてもらうための（注10）啓発教育などが行われたのである。オオカミに対する偏見は払拭されたとはいえないが、しかし社会が全体としてオオカミ復帰計画を支持するようになったということは、④オオカミの正しい実像をとらえようとする努力があつてはじめて実現されたことといえよう。

こうしたオオカミと人間との関係のなかにはさまざまに学ぶべきことがある。その最大のものは、私たちは偏見から逃れることができるか、ということであろう。ヘビは怖い、虫は汚い、タヌキはまぬけだ、キツネはずるいなどなど、その例をたくさんあげることができる。私たちはこうした偏見から完全に解放されることはむずかしいが、科学的な姿勢や知識はそのことを小さくするのに有効である。また、ひとつの動物の魅力だけでなく、その動物が果たす生態学的役割を示すことで、その動物のもつ価値や意義を伝えることができる。

(高槻成紀／南正人『野生動物への2つの視点』)

(注1) いもち病Ⅱ いもち病菌の寄生によって稲に発生する病害。

(注2) ウンカⅡ 稲の汁液を吸い、枯らす害虫。

(注3) シシ垣Ⅱ イノシシやシカなどの獣が田畑に侵入するのを防ぐための垣。これについては、本文より前にふれている。

(注4) 畏怖Ⅱ おそれること。「畏」はおそれる、「怖」はこわがる。

(注5) 邪心Ⅱ よくない心。悪い心。

(注6) 末裔Ⅱ 子孫。

(注7) 蔑視Ⅱ さげすんで見ること。見くだすこと。

(注8) 植生Ⅱ 植物を、生育する場所と一体化している言葉。

(注9) 払拭Ⅱ すっきりぬぐい去ること。

(注10) 啓発Ⅱ 教え導き、より高い理解を与えること。

問一 傍線部①「近代化以前の日本人」とありますが、オオカミは「近代化以前の日本人」にとってどのような存在でしたか。解答欄に合

うように、本文中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

問二 傍線部②「悲劇的なこと」とありますが、筆者はどのようなことが「悲劇的」だと考えているのですか。

問三 傍線部③「皮肉な経緯」とありますが、どういう点が「皮肉」なのですか。

問四 傍線部④「オオカミの正しい実像」とありますが、それはどのようなものですか。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

「ぼく」の名前はアリ。八つのとき、母親の再婚により、ドイツからオーストラリアに引っ越してきた。もうじき、それから三年になろうとしている。

オーパ。ドイツ語で、〈おじいちゃん〉のこと。

ママーは、〈母さん〉のこと。ぼくの母さん、名前はイロナ。

なにかドイツ語言ってみて、とあるときトマスにせがまれて、「オーパ」と言ったら、このひびきにはなじみがあつたようだけど、もうひとつ言ってみせたら、（注）トマスはくすくす笑った。

そして「ママー」とまねをした。「ママー、ママー。お話し人形みたいじゃん」

「ふん、つまんないこと言うなよな。笑ってなんかやんないよ。おんなじこと、前にもだれかに言われたよ。それにもう、ママーなんて呼んでない。母さんって呼んでるよ。ほんとにほんと」

そうは言っても、ドイツ語を、ぼくはちゃんと覚えていた。話す機会がたまにあつて、そのときのために、頭にしまいこんである。たとえば、親戚のだれかと長距離電話で話すとき。母さんとも、ドイツ語で話すことがたまにある。目がさめて、ああ、夢のなかでドイツ語をしゃべっていたなと、思い出すこともある。でも、起きているときは、なにを思うにも英語でだ。父さんのことを思うときですら、英語でだった。

ぼくの父さん。名前はエミール。

①父さんは、てのひらほどの、一枚の写真のなかに住んでいる。明るい色のセーターに革のジャケットをはおり、につこりと大きな笑みを見せている。父さんにあかば用のバックバックでおぶわれて、幼いぼくも写っている。帽子をかぶり、マフラーをして、毛糸のミトンをはめたぼく。父さんといっしょに笑ってる。

ベルリンの平和集会に参加したときの写真よ、と母さんは言った。人波のなかの、父さんとぼく。ふたつの笑顔。シャッターを切ったのは母さんだ。

おなじ人波のなかで、父さんも、母さんに向けてシャッターを切った。そつちの写真はアルバムにおさめてある。父さん母さん、一歳、二歳、三歳のぼくが住んでるアルバムに。

父さんとぼくを写したほうは、おなじものが二枚あって、それぞれ、アザミの模様をほどこした銀色の額に入れられ、ひとつは母さんの寝室に、もうひとつは、ぼくの枕もとのテーブルに飾^{かざ}ってある。父さんは、遠くからぼくにほほえみかけてくる。ぼくはよく想像してみる。父さんにバックバックでおぶられるって、父さんの声を間近に聞くって、どんな感じだっただろう、と。

「ねえ、父さんのこと、思い出したりする？」母さんに、いちどたずねたことがある。

「あのね、アリ、母さんは毎日、父さんのことを思っているわ。あなたは？」

ぼくは肩^{かた}をすくめた。「そりゃ、いまも生きててくれればいいのにな、とは思うけど」きょうも晴れならいいのにな、そんな口調で言っ
てしまつて、②だからぼくは不安になつた。どうでもいいみたいに聞こえたんじゃないかなあ。

でも、母さんは言つた。「父さんが生きていれば、あなたのことをさぞや自慢^{じまん}に思うでしょうね」

それで、ぼくにもわかつたんだ。母さんはほんとうに、父さんのことを思いつづけているんだつて。ときには、ぼくのぶんまでも。

父さんの形見を、ぼくはふたつ持っている。ひとつは、銀の腕時計^{うでどけい}。太陽と月の絵が、昼と夜とにかわりばんこにあらわれて、文字盤^{ばん}の上をぐるぐるまわる。もうひとつは、浮き模様を織り出したサテンのチョッキだ。毎週、金曜と土曜の晩、ぼくはこれを着て、カフェを手伝う。母さんの話によると、オーパが着ていたチョッキを——若いころにインドを旅して買ったチョッキを——父さんがすぐくほめて、そうしたら、ゲッティンゲンの市で、オーパがよく似たチョッキを見つけて、父さんにプレゼントしたんだそうだ。

「これできみも、老いばれヒッピーの仲間入りができるぞ——オーパったら、父さんにそう言つたのよ」母さんは、なつかしそうな目になつた。「ふたり、すっかり気が合つて。エミールとオーパ。冗談^{じやうだん}ばかり言い合つてたわ」

父さんはどこへ行つたの？ どうして帰つてこないの？

ぼくは何度もたずねた気がする。いや、たずねたのにちがいない。母さんは答えてくれて、そしてぼくも、最後にはのみこむことができ

たから。

あれは金曜日だったわ、父さんはいつもより早く仕事に出たの。あなたが三つになって二週間ときだった。会社でコンピュータに問題が起きて、父さんは、その日のうちに解決しなきゃならなくなった。まだ夜も明けてなくて暗くてね、おまけに雨も降ってたわ。で、道路で大きな事故があった。車が何台も巻きこまれて、おおぜいの人々がをした。父さんも……エミールも、大けがをして、そのまま逝ってしまったの。

その話をようやく理解できたのは、五つのときだ。それからずっと、父さんの（注）^{さいご} 最期のことを、ぼくは思いつづけてきた。③でも、母さんには、それきりたずねはしなかった。そのかわり、「ぼく、父さんに似てる？」^③ ってきいてみた。知りたくて。

これには母さんも、ちよつぱりだけど笑みを浮かべて答えてくれた。「父さんも、あなたとおなじで数学が得意だったわ。コンピュータにもすばらしくわしかった。音楽も大好きでね。ただし、楽器を弾くのは大の苦手。だけど、歌はうまかった。いい声をしていたわ。父さんて、ほんとにすてきな人だったのよ、アリ」

「ジェイミーみたいに？」

母さんは、ちよつと考えこんでから言った。「似ているところもあれば、全然似てないところもある」

ジェイミー。ジェイムズ・ニコル。

「ぼくはね、アリ、きみの父さんに取って代わろうとは思ってない」とジェイミーに言われたことがある。「ぼくはぼくだ。きみが、いつでもなんでも話せる相手、と思つてほしい」

ぼくは、だまつてうなずいた。④ そんなふうにつてくれて、うれしかった。それでもやつぱり、胸のどこかが、へんなふうにしちくりとした。ぼくはきつくまばたきし、アザミの模様の額に入つた写真のことを思つた。

あれは、ジェイミーがずうつと前から知つてゐる場所を、三人でハイキングしてゐたときだ。丘には、むかしの金の採掘でぼこ穴があいていて、古い機械も残されてゐた。囚人たちのつくつた道。アカシアの花が甘くにおつた。母さんたら、三人で探検してるといつもたいていそうなんだけど、このときも、どんだん先を歩いてゐた。

「母さんは、いつもあんなに早足なのか？」ジェイミーがぼくにたずねた。

「うん、いつつもだよ。ぼく、小さかつたときなんて、走つて追いつかなくちやなかった」

「ドイツ語で、もつとゆつくり」って、なんて言うの？　アリ、大声で言つてやつてよ」

「ねえ、母さん」ぼくは母さんのほうへ声をあげた。丘のむこうへ、いまにも姿を消しそうだ。「マッハ・ラングザーム！」

「ねえ、アリ、ドイツ語なまりが少し取れてきちやったわよ」と母さんに、二度だか言われたことがある。「前とはちがつてきたもの。母さんにはわかる。飛行機雲……みたいになんて、だんだんだんだん消えていつてしまうのね。そのうち、あなたの英語、そこらのおちびの（オスィー）みたいになるんじゃない？」オーストラリア人を指す（オージー）を、母さんは（オスィー）と発音する。

もうずいぶん前の話だけれど、こつちの学校に転校してきて半月ぐらい、ぼくはなにか言うたびに、ほかの子たちに笑われた。おい、アリ、おつかしいよ、おまえの言葉。

ねえ、アリ、ドイツ語でのしり言葉、言つてみて。

なあ、アリ、「マニング先生はあほんだら」って、ドイツ語でなんて言うの？

でも、そうこうするうち、また何人か転校生が入つてきて、⑤ ぼくはようやく、「ぼく」でいられるようになった。アリ、サッカーの名ゴールキーパー。アリ、算数の問題をだれよりも早く解く子。アリ、町はずれの、洞窟^{どうくつ}のそばのカフェに住んでる子。

ぼくにあれこれきいてくるのは、いまではカフェのお客たちだ。はじめてやつてくるお客たちだ。ぼくが、いらつしやいませと言つてテーブルに案内すると、言葉になまりを聞きつけてたずねてくる。「きみはこの生まれ？」

ドイツのハットルフです、とぼくは答える。八つとき、母さんとオーストラリアへ遊びにきて、とても気に入ったので、こんどは住むことにしたんです。こつちへ来てもうじき三年になります。ここで料理をつくるのは、母さんと、いまの父さん。食事を出すのは九時半までです。そのあとまでいてくだされば、生演奏が聴^きけますよ。ええ、あそこのステージで。演奏するのも、母さんと父さんです。アリソンとベンもいつしよです。ふたりとも大学生で、ピアノとコントラバスを担当します。いえ、ぼくはステージには立ちません——聴^きいてるだけです。ワインは、冷やしたほうがよろしいですか。冷蔵庫にちよつと入れておきますけれど。注文は、べつの者がうかがいにまいますので。ええ、ここの生活、気に入ってます——楽しいです。名前？　アリです、アリと言います。

（サイモン・フレンチ作　野^のの水^み生^お訳『そして、ぼくの旅はつづく』）

(注1) トマスⅡ「ぼく」の友だちの一人。

(注2) 最期Ⅱ命が尽きるとき。

問一 傍線部①「父さんは、てのひらほどの、一枚の写真のなかに住んでいる。」とありますが、「住んでいる」という表現から、アリのどのような思いが読み取れますか。

問二 傍線部②「だからぼくは不安になった。」とありますが、アリの抱いた不安はどのようなものですか。

問三 傍線部③「でも、母さんには、それきりたずねはしなかった。」とありますが、アリはなぜ母さんにたずねることをやめたのですか。

問四 傍線部④「そんなふうに言ってくれて、うれしかった。」とありますが、アリはなぜうれしかったのですか。

問五 傍線部⑤「ぼくはようやく、『ぼく』でいられるようになった。」とありますが、それはどういうことですか。

【三】

次のカタカナの部分を漢字に直しなさい。

1 赤組にグンバイが上がる。
4 ホシヨウ書つきの製品。
7 本社にハイゾクされる。
10 自宅にシヨウタイする。
13 もちをやく。

2 ミジユクな考え方。
5 レンタイ責任。
8 キンベンな性格。
11 マドを閉める。
14 今年の夏はアツい。

3 家をルスにする。
6 カイテキな室温。
9 チヨサク集を刊行する。
12 車にノる。
15 ケワしい道のり。

受験番号

氏名

評点

【一】

問一

存在。

問二

問三

問四

【二】

問一

問二

問三

問四

問五

【三】

11	6	1
12	7	2
る		
13	8	3
く		
14	9	4
い		
15	10	5
しい		